

「復興の日本人論」誰も書かなかった福島

川口マーン恵美著：グッドブックス

ドイツ在住の作家として海外と日本を比較する作品が多い川口氏の新作。今回は福島の取材をもとに、これまではマスコミでとり上げてこなかった、巨額の賠償金に伴い生じている住民間の感情問題や、風評を作り続けるマスコミの姿など、著者の目から見た福島の問題が取り上げられている。

著者は福島で取材中、「東電は謝罪をしていない」という声を聞いて驚いた。東電はことあるごとに謝罪の言葉を述べているのに、謝罪がないと感じている人にはどのように接すればいいのだろうか。ドイツでは2015年に飛行機がフランス山中に墜落した事故で、航空会社は事故直後謝罪をしなかった。欧米では誰かが自分の罪と認めなければ、謝罪は発生しないし、法を犯さない限り罪を認めることはない。この時の事故では、航空会社は約600万円を見舞金として支払い、追加の慰謝料300万円を払ったが、遺族は人の命がベンツよりも安いのはおかしいとして争っている。つまり、欧米では賠償については感情論ではなく、法律だけが指針になっている。だから、福島のような事故が欧米で起きていれば、電力会社は相応の慰謝料は払ったかも知れないが、加害者という立場を一手に引き受けることだけは徹底抗戦したであろう日本と欧米で対応が異なる例かもしれない。

福島を回ると、巨額の賠償金で御殿を建てた人や、さらに慰謝料を請求する人など至る所で金銭をめぐる不協和音が聞かれた。既に帰村し新たな町づくりをしているところもあるが、マスコミは悲劇の演出に忙しく、復興が進んでいるというような明るい話題はとり上げない。

今回の事故対応は民主党政権の大失敗で、3.11以降国家的損失が続いている。廃炉も無理に急ぐ必要はない。除染が終わったところから整備して、工業団地やワイン畑を作ったりして浜通りを活性化したらどうだろうか。

全体に福島の復興のためにはどうすればいいか、それには原子力を止めてしまうような選択はしないで欲しいという著者の声が聞こえてくる図書である。エネルギー問題に関心のある人には是非読んで頂きたい。

(エネルギーレビュー2018年3月号)

(シニアネットワーク会員 齋藤 隆)